

Section 7 追加情報 2

～ 各職員の想い ～

● サービス管理責任者の想い

利用開始時は不適應を起こさずに作業ができていたことを高く評価している。しかし、一郎さんの意思を確認せずに「好きでトイレにいる」という職員の考え方が、将来の虐待や差別的な対応につながる芽になることも懸念している。自分が就職したての頃にも似たような事例を経験しており、きちんと現在の状況をアセスメントし、対応の仕方や環境を工夫すれば、大幅な改善が図れると考えている。また、経験が少ないスタッフや専門性が備わっていない職員も多いなかで、一郎さんの言葉や態度を表層的な視点で受け取ってしまい、職員の勝手な解釈がまかり通っていたので、早急な対応の必要性を感じている。サービス管理責任者としては、一郎さんのプログラムに乗れない原因や背景要因を探り、投げ出すことがないような対応がしたいと想い、会議に臨んでいる。

※検討会に臨むポイント

- ・施設から追い出せば完結するといった議論にならないように配慮する。
Ex：うちの施設には向かない人だから、自分に合う他の施設に移ってもらった方がいいのでは… など。
- ・一郎さんだけの問題にせず、今後も不適應を起こす利用者があることを前提に、今回の背景要因などをスタッフ間で考え、議論できるように導く。
- ・具体的には、どのように通所したいのか、何か好きなことはないかなど、具体的に考える。
- ・人間の多様性を認め、偏った思考や行動に陥りやすい経験の浅い職員の視野を広げ、やる気を引き出すような検討会になるよう留意する。

● 田中生活支援員（ケース担当者）の想い

田中さんは、一郎さんがプログラムを拒否する理由がわからないまま放置しているのは、業務の多忙さが原因だと考えている。どこかに解決の糸口があるのではないかと考えている面もあるが、介護の勉強などをした経験がないので、なにをどうしたらよいかわからないでいる。今までも、先輩たちが改善に向けて努力をした経験談を聞いてきたが、うまくいかないで、自分には「荷が重すぎる」と考えている。しかし、福祉への情熱は有しているが、同僚などから「お前が担当なんだから、なんとかしろよ」と言われてしまい、業務への負担感が増している。また、同僚の女子職員の中にも支援がうまくいかず、自信を失い思い詰めてしまっている現状を見て、利用者との関わりに怖気づいている。田中さん自身は、業務に対する疑問や愚痴などを気軽に話せる人や体制が欲しいと思っている。

※ポイント

- ・どうか解決の糸口を探したいと思うが、業務も多忙で自分でもどうしたらよいか分からなくなっている。
- ・同僚からの「お前が担当なんだから…」の言葉に強いプレッシャーとストレスを感じている。
- ・日常的に気軽に相談できる先輩がいないことに不満を感じている。

●鈴木生活支援員（主任）の想い

鈴木さんは、一郎さんがこのまま事業所を利用継続することは難しいと考えている。主任という立場からは、活動に参加できない利用者の対応には時間と労力が必要であり、利用者お一人おひとりにきめ細かな対応が必要であることを理解しているが、今回の件は今までに経験したことのない不適応状態であるため、どうしたらよいか分からないでいる。そもそも一郎さんは、普段の活動の様子からは、この事業所の活動内容には向いていないのではないかと考えている。また、一郎さんの件で、他の利用者の活動スケジュールにも影響を及ぼしており、職員からもその対応に苦慮していることに関して不満の声が挙げられている。職員への負担や他の利用者へのサービス提供を考えた場合に、一郎さん一人のニーズに伝えていくことよりも、全体的なサービス提供を考えて、職員ニーズを優先すべきではないかと考えている。

※ポイント

- ・今回のことだけではなく、サービス管理責任者と経験の浅い生活支援員の間には挟まれることに不満を感じている。今回も事業所体制への不満も併せて意見したいと考えている。
- ・担当者個人の責任も大事だが、定期的にもっと気軽に議論や検討ができる体制があれば、もう少し前向きに考えられるし、チーム力もアップするのではないかと考えているが、自信はない。サービス管理責任者がリーダーシップを発揮してくれれば、それについていきたいという想いはある。

●佐藤生活支援員（新人）の想い

佐藤さんは、仕事に慣れることで精一杯の状況である。一郎さんの件に関しては、このまま事業所の利用を続けることは難しいと考えており、入所の生活介護施設へ利用先を変えるべきであると考えている。学生時代の実習先が生活介護施設であったことから、その時の利用者の印象と一郎さんの印象がダブっており、考えが引っ張られている。地域生活のためのサービスをよく理解していないこともあり、母親の年齢を考えると、入所施設の生活介護の順番待ちが妥当であると思っている。今回の会議でも、生活介護施設の利用を強く勧めたいと考えている。

※ポイント

- ・支援者が支援しやすい方法が、必ずしも本人中心の考え方と合致しないことに気付いていない。サービス管理責任者からの説明や指導があればそれを理解し、考え方を改めることができると考えられる。
- ・自分のケースでも困っているのに、事業所内で話し合える会議を定期的に開いてほしいと望んでいる。

●看護師の想い

非常勤の看護職員だが、定年まで医療機関に勤務し、退職後に障害福祉に興味があり現在の職場に入職した。看護師としての経験や技術に関してのレベルは高く、利用者家族からの人望が厚い。

一郎さんの便失禁に関しては、医療的な下剤の調整ではなく、精神的なものが大きいと考えている。医療に関する課題や問題があると、すぐに職員が福祉的な発想や考え方を検討せずに、看護師に伝えてくることに不満を持っている。今回の件に関しても、職員がしっかりと時間をかけて丁寧に対応すれば、よい方向に向かうと考えているが、サービス管理責任者を差し置いて意見することに躊躇している。サービス管理責任者から看護師に意見を求められれば、便失禁に関する自分の考

えを伝えたいと思っている。

※ポイント

- ・福祉よりも医療が上だと根拠のない考えを持っている。医者は絶対であり、医療的なケアを事業所で行うことは、ほぼできないと考えている。
- ・人情家で面倒見もよく、今回も一郎さんの現状をなんとか改善したい想いを強く持っており、自分に協力を依頼されることを待っている。